令和４年６月１日

令和３年度　社会福祉法人まるこ福祉会

事業報告書

第35回子どもレストラン（2021.7.3･泡プール）

まるこ福祉会 令和４年度 第１回 評議員会
2022年（令和４年）６月28日（火）
料亭 緒環 11時00分

1.総括

先の見えない日々が続く中で、わたしたちは今、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、その影響は一過性では終わらず、「コロナ以前」と「コロナ後」で歴史の一線が引かれることになるのではないかと予測する見方もある現在です。

しかし将来、歴史を分かつものが何だったのかを顧みる時に、それを物語る甚大な被害の記録だけで終わらせてはならないと思います。

やはり、その歴史の行方を根底で決定づけるのはウイルスの存在ではなく、あくまで私たち人間にほかならないと信じるからです。想像もしなかった事態の連続で戸惑い、ネガティブな出来事に目が向きがちになりますが、危機の打開を目指すポジティブな動きを希望の光明として捉え、その輪を皆で広げていくことが大切であると考えます。

そこで思い出されるのは、アメリカのハーバード大学の世界的経済学者である、ケネス・ガルブレイス博士の言葉です。博士は、あの世界恐慌や第二次世界大戦をはじめ東西冷戦など多くの危機の時代にその現場に身を置き、人々が被った傷跡を目の当たりにしてきた体験を胸に刻み、社会の在り方を問い続けた碩学でした。それは、「いかなる試練も共に乗り越え、『生きる喜び』を分かち合える社会を築くことが求められている」との箴言です。

一方、２０３０年に向けて国連が推進している持続可能な開発目標であるＳＤＧｓが採択されて本年で７年を迎えます。コロナ危機で停滞したＳＤＧｓの取組を立て直し、その根底を貫く「誰も置き去りにしない」理念を進め、皆で『生きる喜び』を分かち合える社会の建設に向かい、私たちまるこ福祉会は、２年後の令和６年、創立２０周年を大きな目標として、あらゆる人々と連帯しながら前進していきたいとこの１年を総括しながら、以下に令和３年度の事業報告をします。

具体的には、まるこ福祉会創立１７周年の佳節を迎える中、地域福祉の灯台として、地域住民や各種団体と連携・協力のもと、「地域福祉を視点に特色ある事業」を展開し、また、本来の各施設での様々な事業を推進してきました。

中でも、「地域福祉を中心とした事業計画」における特質すべき事業として以下の取り組みを実践しました。

（１）「こどもレストラン」の開催　年間１２回　累計5,０００名余
　　特色ある開催として、
　　・第４２回「寿司とヴァイオリン演奏」（令和４年２月５日）
　　・第４３回「うな重食べて、親子で笑顔」（令和４年３月５日）
（２）「東信地区に子ども食堂への物流拠点完成」（令和３年５月２６日）
（３）「８．６平和の心メッセージ・コンサート」（令和３年８月６日）
（４）「０円食堂・０円スーパー」（令和３年１２月１９日）
（５）「フードバンクｉｎ上田高校、まるこ福祉会」（令和４年２月２８日）
（６）「あれから 11 年震災の心バトンリレー」（令和４年３月 11 日）

上記の他に、コロナ禍の中でしたが、まるこ福祉会として、チームあったかい輪の温かな支援を受け、①きらりホールでの開催（布あそび、ヨガ講座、パドル体操、発声による健康講座、折り紙、子育ての各講座）②きらり市民ギャラリーでは、絵手紙講座、水彩画展、堀尾園子展、谷本清光展、鳥山信子展、木彫教室、油絵展等の開催。③サロンあったかい輪での有効活用等がありました。また、徹底した検温、手指消毒、換気、健康観察等によるコロナウイルス感染拡大防止による対策により、クラスター等の発生もなく、安全安心な環境のもと、実施できたことは大きな成果でありました。

以下では、前半に、「地域福祉を中心とした事業報告」を、また後半では、「施設別事業報告」をいたします。

2、まるこ福祉会が目指す理念

「人の心に幸せの種をまく」

明治の文豪・幸田露伴の「努力論」の中に、「人間の生き方」を３つに分類したところがある。それは「惜福」「分福」「植福」である。

「惜福」とは、自分が持っている財産や宝を無駄遣いしないこと。

「分福」とは、自分だけ楽しまず、人に福を分けてあげること。

「植福」とは、幸せを、人の心の畑の中に、種を蒔いてあげること。そして、幸せの花を咲かせてあげる人のこと。

私たちまるこ福祉会は、この「植福」を、障害の有無にかかわらず、どんな人々も味わえるよう、施設やグループホームにおける様々な作業や生活をとおし、その人の人生において、心の畑に幸せの種をまき、幸せの花を咲かせることを、永遠に目指していきます。

○理念の達成を目指し、職員朝礼で確認し合う具体的実践項目として、次の事を「職員指針」と定め掲げて、前進ある日々を送っています。

（１）オアシス宣言

「オ」…　思いやりの心で

「ア」…　明るさを大切に

「シ」…　幸せなときを

「ス」…　過ごせる職場　ホーム　まち　人生を目指す

（２）　「あいさつの心」

あ…あかるく笑顔で

い…いつでも

さ…さきに

つ…つづけて

（３）「明るい職場は心も成長」

み…認め合う心　（尊重）

た…高め合う心　（向上と練磨）

よ…寄せ合う心　（協調）

（４）ＡＴＭ

Ａ…明るく　　Ｔ…楽しく　　Ｍ…前向きに

令和３年度　地域福祉を中心とした事業報告

～地域福祉の灯台として、「社会貢献活動」に努める事業から～

１　私たちの願いは、地域住民との連携・協力により、『地域福祉の灯台』としての自覚と使命に燃え、地域住民の文化活動及び人権尊重の精神の高揚を推進し「生涯学習の学び舎」を構築するものである。

平成２８年１０月１５日にオープンした福祉空間施設は、５周年を迎え、①パン工房のぐらんまるしぇ、②厨房（平成２９年２月１日給食開始）、③サロンあったかい輪、④きらりホール、⑤きらり市民ギャラリーの５施設は、子どもからお年寄りまで、だれもが気軽に足を運び、潤いの時間を心豊かに過ごせることが出来る「オアシス」の場として、『地域福祉の灯台』の役目を果たすことができた。また、えんじょいプログラムとして６教室の講座が実施されましたが、本年は、コロナ禍により、開催の延期や縮小を余儀なくされた。

２　「こどもレストラン・きらっと」の連続開催

子ども食堂の原点は、今から２２年前の平成１２年に東京の練馬区で始まった「貧困家庭の子どもに食事を提供する」ことが発端であるが、現在は、様々な課題解決の活動にと変容している。

全国では、６,０００余か所（ＮＰＯ法人全国子ども食堂支援センター、２０２２年１月調査）あり、様々な課題解決に取り組んでいる。

（１）第１の特長として、核家族化や超高齢社会の到来により、子どもからお年寄りまで、互いに支え、認め合い、高め合う人権尊重を基盤にした、思いやりの心を耕す子どもの居場所づくりである。さらに、異世代間交流の場としての子どもレストランを企画運営するものである。

（２）２点目は、その運営スタッフの中心として、地元の丸子修学館高校や上田高校、上田東高校の生徒や長野大学の学生たちが、毎回意欲的にボランティア活動として参加している点である。子どもと共に遊びや学習、集団活動を通して、子どもとの関わり方やコミュニケーション能力を学び、将来は、子どもとかかわる職業に就きたいと考え、信州大学教育学部を受験

し見事合格した高校生や長野県職員として福祉分野へ輩出できたことである。

（３）「子どもレストラン・きらっと」での風景から

令和３年６月「高校生と大学生のボランティアに拍手」（信濃毎日新聞の記事から）

『ボランティアで参加した地元の高校生と大学生１８名が、英語鬼ごっこで、小学生をおんぶして逃げ回る姿。転んで床に座り泣いている女の子の手を引いて椅子に座らせ安静を施す女子高校生。部屋で学習する小学生に寄り添い助言する大学生。皆で作ったピザを、テーブルでは小学生が大学生と談笑しながら食事を。清掃も若いボランティアが行いました。
先日は、２６名の高校生と大学生が、子どもを引率して近くのバラ園に遠足。横断歩道では高校生が小学生の手を引いて渡る姿が。バラ園で写真を撮ると、小学生、高校生、大学生が肩を寄せ合ってカメラの前に座る姿。
昨年、ユネスコで発表された「子どもの幸福度」では、日本は３８カ国中３７位の最低の数字である。物の豊かさには恵まれても心の豊かさに欠乏している日本の子どもたち。
しかし、子ども食堂で、学校や家庭では味わえない異年齢集団で遊ぶ・学ぶ・食べることで、自然に心がつながっている。大学生は、「ボランティアで子どもと触れ合うと自分の心が磨かれます」と。「今時の若者は」と言われた過去は去り、「今どきの若者は、豊かな心で熱と力がある」と感じているこの頃です。』

（４）これが、「生きる喜び」を体感し、子どもから地域住民の高齢者まで、食事作りや遊び、伝統文化の継承活動を通じて、心の絆を結び、生きがいと喜びのオアシスを創出できていることが３つ目の特長である。課題もあるが、今後は１００回の開催を目指し、子どもたちのためのレストランを発展させていきたい。

３　丸子ライオンズクラブと共催の「０円スーパー、０円食堂」の開催

このような地域住民の小さな声を、より大きな希望を抱く機会と捉え、歳末に、コロナ禍で生活に困っている方々のために、本年１２月１９日の日曜日「０円スーパー、０円食堂」の開催を決定した。

今回は、上田市社会福祉協議会、まるこ福祉会、上田市連合婦人会、ＮＰＯ法人ホットライン信州を共同開催とし、また、日赤奉仕団を始めとした各種団体や会社等を協力団体として、地域とのつながりを生かし、地域福祉を推進し、社会貢献活動の一環として「人と人がつながりから、誰もが輝き、絆を深める地域社会の構築」を目指そうと考えた。

（１）１１月下旬、「０円スーパー、０円食堂」を聞いたという８０歳代の御婦人が軽トラックで来られた。「私は農家で、今年はじゃがいもが豊作でした。我が家は、今、主人との２人生活です。１９日に、皆さんでおすそ分けしてください。」と言って、ジャガイモの入った段ボール４箱と大根を寄贈されたのである。心が老いなければ、人は美しい心のままでいられると感じたのである。

１２月初旬、まるこ福祉会の近隣に住む民生委員の方が我が法人に来られた。

「大したものでないけど、餅とスープを持って来ました。１２月１９日、困った方に差し上げてください」と。

これらはほんの一例であるが、１２月に入ってからは毎日のように、各種団体や組織、個人からも大量のお米、野菜、果物、日常品、浄財等が届けられたのである。

「闇が深ければ深いほど、暁は近い」と言われるが、現代社会の暗い闇の中であっても人間の心が輝き、明るい未来が、今、地域社会に光を灯そうとしていると実感できる昨今である。

（２）午前７時４５分には、会場となった上田市長瀬市民センターに、丸子ライオンズクラブ役員（須永さん）が、「あさつゆ」のりんご箱８箱を持ってきた。「今朝はすごく寒かったけど、いい天気になって良かった。本当によかった」と、ほっと安堵の胸をなでおろしながら白い息で語りかけてきた。

（３）午前８時には、スタッフが２０名余も集まり、寄贈された食料品や日常品を会場内に移動を始めた。「おはようございます。」とか「お願いします」の声があちこちから聞こえてくる。そこに、来場者第１号のご夫婦が８時４５分には到着していた。今日のこの日をずっと待っていたのである。

「新聞のチラシを見てきました。まだ年金がもらえないので、ここで食料をもらえると助かるよ。生活費で一番切り詰めているのが食料費だから。

ありがたい」

（４）午前１０時過ぎには、すでに会場入り口に２０名余の人だかりができていた。会場内も、「野菜・くだもの」、「日常品」、「調味料」、「上田連合婦人会」、「ホットライン信州」、「０円食堂」と書かれた表示の前には、山積みとなった食料品がここ狭しと並んでいた。ボランティアスタッフは、９４名に達していた。

「竹は、大水にも朽ちず、大風にも倒れない。それは、地下で根が繋がっているからである」とは、小さな頃、親から聞いた言葉である。今回の主催者である丸子ライオンズクラブはもとより、上田市社会福祉協議会、上田市連合婦人会、ＮＰＯホットライン信州、まるこ福祉会の会員や職員が、互いの立場を超えて、この取り組みに汗を流したのである。

物資を並べるときも、「ありがとう」の言葉が、互いに自然と心の奥に入ってくるのはなぜか。それは、信頼の絆ができているからであると感じた。

（５）午前１１時を前に、１０時４５分と同時に、「０円スーパー、０円食堂」が開店した。その瞬間に５０人以上の人が一気に会場内に入っていった。

ここからは、来場者の声を以下に紹介したい。

① ５０代の兄と４０代の妹さんのお二人で来られ、妹さんの声です。「兄は、車の代行の仕事をしていますが、まだコロナ禍の影響で給料は、以前の半分以下です。そのため食料は、兄が深夜のお店で値引きされた食品を買って来てくれます。私は、足が障害でなかなか外に出て買い物ができませんので、買い物は兄に頼みます。今回は、こんなにたくさんの食料や日常品までいただき、大変助かります。これで１週間はもちます。」

② ３０代のお母さんは、小学生の娘さんを連れて来られた。「母子家庭ですので、買い物は私がします。新聞に入っているチラシをみて、自転車で一番安いお店を探し、そこで商品を選び、少なめにして購入します。でも今日は、選ぶこともなく、悩むこともなく、たくさん食料品をいただくことができました。うれしいです。ありがたいです。」と。会場内を見渡すと。父子家庭、外国籍の方々、地元の大学生等が、「助かる」、「うれしい」と連発しながら各食料品や日常品をビニール袋や持参したマイバッグに喜んで入れていた。会場外を見ても、１０メーター近い行列ができていた。

③ ある役員が語っていた。「会場に来るとき、暗い顔で不安そうな人も、帰る

時は、重いバックを持って笑顔になって帰っていく姿が印象的だった」と。

④ ５０代の女性が語った。「私は、専業主婦です。家計のやりくりはコロナで今一番大変です。そこで食費を一番先に削るのです。主人も娘もいますが、体調が悪くて家にいます。だから生活が大変。でも、今日は、こんなにもたくさんの食料をいただき、少しでも生活が楽になるかと思うとうれしいです。」

午前１１時３０分頃は、会場内は大盛況となった。あまりにも数多くの食品や日常品に、どれを選ぶか時間さえかかるのである。

その時であった。玄関は、帰る人がスリッパを脱いだままにした状態であったので、上田高校の生徒が、乱雑になったスリッパをそろえてくれていた。さらに、「靴は、間違えないように」と書いた掲示物も整頓してくれた。

こんな心遣いが自然にできる高校生ボランティアも大変ありがたい。この日は、上田高校生と先生１人もボランティアとして参加してくれたのである。

⑤ ４０代の母親は、２人の娘さんを連れて来た。「今日は、日曜日でも主人は仕事です。私が、家計をやっていますが、主人のボーナスが出ないんです。これって、あり得ますか。だから、これほどまで食品をもらえてうれしいです。夕飯は、何にしようか、娘たちと相談します。」

⑥ ８０代のおばあちゃんが来た。「いやあ、こんなにもたくさん、どれを頂くか迷ってしまいました。こんなにたくさん食べ物を出してくれる方に、感謝したいです。そういう方がいるんですね。大事にして食べたいです。」

⑦ 母は、６０代で、父親は７０代、私は、４０になったばかりです。「両親が障害をもっているので、買い物は私がしますが大変です。歳をとってきて段々とわがままが出てきました。これは要らない、これを食べたいと。でも、こうやって、たくさんの食料をいただけるなんて、ありがたいと思わないといけない。と両親に言ったのですが、分かっているかどうかです」

⑧ 長野大学生が２人でやって来た。「高校までは、家にいて親の作った食事をただ食べていたけど、今、自炊をしていると、やっと親のありがたさが分かってきました。仕送りは２万円、アルバイトで８万位だけど、コロナ禍で居酒屋のバイトが超減ってきたから、今日の食材は生活費が少しういて助かります。」

大学生にとっても、今回の「０円スーパー、０円食堂」は、意味のある開催であったと思う。長野大学生は、２０名程来ていたようである。特に、外食に頼らず自炊をしている学生ほど、食材と親の手料理は、有難味が分かったと実感する。

⑨ ７０代の独居老人は、「こんな世知辛い世の中にあって、たくさんの食料品などを寄贈してくれる方がいるなんて、日本もたいしたもんだと思いました。何もしないで文句だけはしっかりと言う人が多すぎる。もっと困った人のことを考えないといけない。私も、含めてだがね。」

⑩ ３０代と５０代の女性の親子は、「珍しい食品が結構ありました。それに、普段食べられないカニまでいただきました。そのカニ雑炊なんて初めて食べます。高級チョコレートもいただきましたし、外国のオレンジジュースもいただき、超嬉しいです。高級チョコレートは、久々です。」

⑪ ８０代のおばあちゃんは、「団地に住んでいます。足もなく車もないので、今日は、お友だちの車に乗って連れてきてもらいました。ここに来れない人がいるので、その分まで持っていっていいですか。」と。早速に２人分の食料品を持って帰ったのである。確かに、本当に困窮している人は、この場所に来れない現状がある。その人のことまで考えての行動であった。

本当に生活に困っている大勢の人のために、食料等を提供し、人に光を当てたい。そのためには、大勢のボランティアの力を借りながら、進めていくことが肝要だと感じる。

「１人で走れば早く走れる。みんなで走れば遠くまで走れる」

⑫ 「母と私の二人で生活をしています。けど、母は、病気で判断ができないので、私が母に代わって食事の準備もしています。

だから買い物が大変です。出来る限り他の店より安いものを選んで買ったり、節約しながら買ったりしてます。今回は、大変助かりますし、無料だし数も多くて嬉しかったです。」と、３０代の娘さんがこう応えてくれた。

⑬ 「ありがたいです。妻は、体の具合が悪いので買い物にも行けません。私が買い物をしますが、石油の値段が上がって物も高くなっていますから、今回は、助かります。こんなにもたくさんの食料品をどっさりいただきました。」と、７０代後半の初老が話してくれました。

⑭ こんな老夫婦もおりました。「コロナだったり、寒かったりして、外になか

なか出られませんでした。買い物も、あまりしないので、家には食べ物も大してありません。今日は、久しぶりに夫婦２人でここに出かけることができました。それに、２人分までたっぷりと食材をいただき、キャベツはあまりにも大きくてびっくりと同時にずっしりと重かったです。買い物難民だからね。助かりました。ありがとうございました。」と、何度も御礼をしながら帰っていきました。

⑮ ４０代のお母さんが、３人の子どもを連れてきました。「うちは、８人家族だから大変です。お米も一升はすぐ終わります。お米は、８人分８袋ももらっちゃいました。おかずがなくても、お米さえあれば何とかなります。醤油をかけてもマヨネーズをかけても食事ができます。そうそう、キューピーマヨネーズも８本もらいました。一人１本だから、子どもの１本ずつ持たせます。これでおかずがなくても助かります。スーパーで買い物をしてもすぐ１万円になってしまいます。今日いただいた分は、どのくらいの金額になるのかしら。来年こそは、明るい年になってほしいです。」

来場者を見ると、コロナ禍の影響等で日常の生活と歳末に不安のある人が大勢いた。その方々は、必死で生活をしていると思う。

今を真剣に生きる者にとって、来年こそ明るい社会になって欲しいと願うのは私一人だけではない。何としても、どの家族にとっても幸せの毎日となることを願わずにはおれなかった。

⑯ 一度、会場内で食料品等を袋に入れて帰った後、また戻ってきた人が、また、２回目、３回目と会場内に入り、ビニール袋に食料等を入れている姿が随所に見られた。大変な生活をしているのだと素直に思うと同時に、他の人にまで譲ってあげたらどうかという気持ちもこみ上げてきた。この両者の感じ方は、人それぞれであるが、それだけ逼迫した生活を強いられている人も多いと感じた。

しかし、今回、ご協力をいただいた皆さん方の真心の寄贈により、物資だけでなく、人としての温かさと感謝を実感したのではないかと思う。

４　上田高校生による「真心贈呈式」の開催

「７７年前の明文を、蘇らせた高校生の行為」

令和４年２月２８日、上田高校生の皆さんが、３４０種の食料品を我が社会福祉法人に届けてくれた。

私たちは、「真心贈呈式」と銘打って、５人の生徒さんから直接その数々の品をいただき、御礼に、障害者全員で、「ふるさと」を歌った。
式の中で、生徒さんは、「コロナ禍で大変な人たちにと、全校生徒にロコミやポスターで呼びかけたところ、たった２週間で缶詰や乾麺等を始め家庭から持参した３４０種が集まり、これは世界の貧困を調べる中で、日本でも同様なことがあると考え、生徒有志で計画をしました」と。
今、ロシアのウクライナへの軍事侵略で、罪のない子どもたちの命が狙われ、生活苦にまでなっている現状がある。
生徒の本当の願いは、ウクライナへ届けたい気持ちであったと察するが、この善意ある行為から、ユネスコ憲章にある「戦争は、人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」の言葉が蘇ってきた。
国際社会で絶対に許すことのできない卑劣なロシアの侵略が起こっている最中に、私たちは何をなすべきか悩む今、この高校生たちの純粋な心と勇気ある行為が、７７年前に採択された明文を大人の私たちの心に教えてくれているようであった。

５　地域住民の自治活動に協力し、共生社会に貢献

（１）地域住民の避難所として、施設（トイレ、水の確保も含め）と駐車場を提供し、地域住民の安心・安全の確保により、地域のセイフティーネットを構築。

（２）　町会の敬老会を始め、各種の会合開催の場所としてきらりホールを提供して、避難訓練や地域行事開催の実施を支援している。

６　幼保の園児との文化・教育交流の推進

長瀬・依田保育園やちぐさ幼稚園を始めとして、地域の園児と障害者・老人ホーム入居者との観劇や音楽会鑑賞の交流を長年にわたり推進。令和３年１１月には、劇団ばくの演劇公演があり、幼・保の園児たちは、年齢差を超えて、みんなと一緒に楽しむことができた。

７　地元の養護学校生徒の受け入れにより、地域交流と金銭教育を支援

地元の上田養護学校の生徒の教育実習を毎年受け入れ、勤労の大切さを学

ぶ機会を提供。高等部１年～３年の全生徒が見学や現場実習を経験した。また、同生徒が、ぐらんまるしぇでの買い物を実体験する機会を提供し、金銭教育を支援することができた。事前学習として身に付いた知識や経験は、将来への進路にも繋がり、卒業後、まるこ福祉会に就労する機会となっている。

８　東日本大震災の福島県南相馬市の「物産販売支援」

ノリを始めとした南相馬市の物産を、まるこ福祉会で購入し、「サロンあったかい輪」で販売をして売上金を全額送金。この取り組みを地道に継続している。

特に、今年は、あの３．１１から１０年を迎え、別項のとおり、「震災の心バトンリレー」１０年詩の朗読コンサート」を開催した。

危機の日常化が進む中、孤立したまま困難を深めている人々を絶対に置き去りにしない精神を、皆で保ち続けていきたい。

パンデミック宣言の１週間後に、あのドイツのメルケル首相が演説した言葉は、未だに私たちの心に宿っている。それは、「私たちの社会は、一つひとつの命、一人ひとりの人間が重みを持つ共同体である」と。

こうした眼差しを失わないことの大切さは、巨大災害が起こるたびに、警鐘がならされてきたのである。それを、私たち自身も心の警鐘として今後も打ち鳴らしていきたい。

９　「８．６ 平和の心 メッセージ・コンサート」の開催

広島に原爆が投下されて７６年を迎えた。「戦争ほど悲惨なものはない。戦争ほど残酷なものはない」と世界の誰もが叫びたいことである。

その戦争の恐ろしさから、世界の平和を目指して、その命や人権の大切さを守り継承しくために、高校生と大学生が実行委員会を作り、以下の内容で、「８．６ 平和の心 メッセージ・コンサート」を開催することにした。

（１）　日　時 ２０２１（令和３）年８月６日（金）１０：００～１１：３０

（２）　会　場 まるこ福祉会　きらりホール（上田市長瀬２８８５－３）

（３）　参加者 児童・生徒・学生、地域住民、まるこ福祉会利用者
　　コロナ感染予防対策により、１００名限定とします。

（４）　発表者　小学生、高校生、大学生、地域住民、利用者の代表者

（５）当日の内容

・作文、詩を朗読。その背景に、ピアノ演奏とオカリナ演奏がある。

・詩と作文の内容は、戦争のこと、平和、命の大切さ、人と支え合うことの大切さ等、作文（原稿用紙１枚～３枚以内）や詩に自由に書きます。

（６）「戦争体験」の講演　　９６歳の柳澤正雄さんから、シベリア抑留の戦争体験をお聞きした。

（７）当日の次第

一部　　司会：学生（大学生）

① はじめのことば　　（学生）　　１分

② 実行委員長あいさつ　　（学生）　　２分

③ 詩と作文の発表　　小学生（西ノ原光さん）高校生（滝澤さん、上田高校生徒、利用者（翠川さん）　紙芝居（連合婦人会、池田さん）　　３５分

二部

④ 「戦争体験」の講演　　柳澤　正雄様　　２５分

⑤ 御礼のことば　　実行委員会（生徒）　　３分

三部

⑥ 嵐のふるさと歌　　ダンスと歌披露　　７分

⑦ 御礼のあいさつ　　主催者、実行委員会　　１０分

⑧ 終わりのことば　　（学生）　　２分

１０　「あれから１１年、震災の心、バトンリレー」

～３．１１東日本大震災に学ぶ　講演と詩の朗読コンサート～の実施

平成２３年３月１１日に起きた、東日本大震災から１１年経った本年、その時の悲惨さを忘れず後世に伝えるために、「あれから１１年、震災の心、バトンリレー」のイベントを計画した。

（１）日　時　令和４年３月１１日（金）１０：３０～１１：３０

（２）会　場　社会福祉法人まるこ福祉会　きらりホール

（３）参加者　上田高校生徒有志、地域住民、まるこ福祉会利用者　約８０名

（４）内　容

第１部　上田市消防署員の方を迎えて、避難訓練　９：３０～１０：１０

第２部　「あれから１１年、震災の心、バトンリレー」司会：上田高校生

① はじめの言葉　上田高校生徒

② 生徒意見発表　中沢さんが、当時、福島県で避難した経験を基に、その時の状況と、福島原発のこと、これからの生き方についての意見発表。

③ 翼を広げて「支え合いの心」　フードバンクｉｎ上田高校　生徒発表

④ 感想発表（参加者から）

⑤ 利用者の歌の発表　「ふるさと」

⑥ 語り「今、欲しいものは何ですか」「被災の小学校３年生の希望ノート」

⑦ 終わりの言葉　上田高校生徒

１１　高校生のボランティア活動の受け入れ

丸子修学館・さくら国際・上田・上田東の各高校の生徒たちが、子どもレストランや「０円スーパー・０円食堂」でのボランティア活動を支援することを通して、福祉に対する体験学習の機会となり、進路指導の一助にもなった。

１２　長野大学、信州佐久短期大学の学生による子どもレストランでのボランティア活動を支援したり、障害福祉サービス事業所での就職事前体験学習を支援した。

１３　地域住民のエコ活動への支援と貢献

地域住民がエコ活動として取り組んでいる古布や衣類、アルミカン等の収集を支援するために、まるこ福祉会に提供されたものを有効活用する取り組みをして久しい。

とんぼハウスやきらりでは、その空き缶回収を推進し、地域住民のエコ活動を支援している。また、再使用できる衣類や補助着の受け入れをして、障害者や老人ホーム入居者への提供に協力している。

１４　県外定住者の支援

北海道出身者の上田市への定住を推進するために、その就労の場を提供し、地域住民との交流を図った。また、福祉空間内の一室で、マッサージ治療を施し、地域住民に憩いの場を提供している。

１５　シェルターの受け入れ支援

住宅と食事の場を提供し、社会復帰を通して社会復帰を果たすことに貢献した。

令和３年度　利用者の日々の成長報告

この１年、まるこ福祉会の利用者は、それぞれの職場において、仕事と生活面において、成長した姿が随所にみられた。ここでは、その一端を紹介する。

社会福祉法の第３条には、福祉サービスの基本的な理念が明記されている。そこには、「福祉サービスは、個人の尊厳の保持を旨とし、その内容は福祉サービスの利用者が心身ともに健やかに育成され、又は、その有する能力に応じ自立した日常生活を育むことができるように支援するものとして、良質かつ適切なものでなければならない」と定められている。

私たち、まるこ福祉会では、この「心身ともに健やかに育成」と「能力に応じた自立した日常生活を育む」を堅持しながら、利用者が、２１世紀の社会で、「明るく、楽しく、前向きに」（我が法人のＡＴＭ）に生きていく力を、まるこ福祉会の日常生活の職場で磨き合うことを大切に考えている。

（１）「雪の降った早朝、利用者自ら、雪かきをしてくれた美世さん」

令和４年１月２１日の朝、まるこ福祉会の一帯は、厳冬の雪が１～２センチ積もっていた。

事業所に勤務してくる職員たちが、息せき切って雪かきをしている姿の中に、一人、利用者の姿があった。

お母さんの車で、雪の事故を防ぐために朝８時過ぎに、まるこ福祉会に到着していた。彼女は、職員の姿を見るわけでもなく、進んで、雪かきを始めたのだ。最初に、送迎車のワイパーをフロントガラスから上げて、雪を降ろし始め、その後は、駐車場の雪かきをしていた。

ある職員が、「朝早くから、雪かきしてくれてありがとう。うれしいです。こんなに雪かきをしてくれて、車も駐車場もきれいになりました。」とお礼を言うと、彼女は、こう言ったのである。

「だって、いつも利用している車だから、送迎の運転手さんが、運転しやすいようにと思ったからだよ。それに、うちらの利用者も、この車にお世話になっているからだよ」と。

彼女の軍手は薄く、きっと手の指もかじかんでいて痛かったと思う。
運転手さんや、利用者さんのことを想って雪かきをしてくれていたのである。
この、相手の立場になって考え、行動する思いやりの心のぬくもりが、早朝の雪を太陽が出る前に溶かしてくれていた。
この１年、利用者にとっては、仕事や生活を通して様々な出会いや経験をした。成育歴や性格の違いがあっても、障害は個性ととらえ、何があってもみんなで話し合い、解決できる風通しの良い職場をつくることは、利用者だけでなく、私たち職員にとっても重要なことである。
・「認め合う心」と「高め合う心」、そして、「寄せ合う心」、この三つの心を大切にして、利用者と共に成長できる職員集団を目指していきたい。その姿を見せることが、利用者の心の成長にもつながっていくものと思われる。

令和３年　マスコミ取材による、まるこ福祉会の事業紹介　（2021年１月～「創立１７周年　社会福祉法人まるこ福祉会」新聞で見る歴史　2022年３月）

今年１７周年を迎えるまるこ福祉会を、新聞記事で歴史を訪ねた。

2021年月日	行事等	新聞社
１月１５日	第１回　うえだ子ども食堂	信濃毎日新聞
１月１６日	阪神大震災から 26 年　防災炊き出し訓練　住民と日赤奉仕団と協力	信濃毎日新聞 ○テレビ放映　４社
１月１９日	阪神大震災の教訓学び、訓練 地域住民と協力の炊き出し訓練	読売新聞
１月１９日	上田で「子ども食堂」 支援の輪　ドライブスルーで	信濃毎日新聞
１月２０日	阪神大震災の教訓に学ぼう まるこ福祉会が炊き出し訓練	信州民報
１月２１日	ドライブスルー方式で「子ども食堂」	東信ジャーナル
１月２２日	まるこ福祉会が防災炊き出し訓練 阪神淡路大震災を教訓に	東信ジャーナル
２月７日	上田　食べ物振る舞う「まつい」	信濃毎日新聞
２月９日	初の「こどもレストランきらっとまつり」利用者や住民ら交流楽しむ	東信ジャーナル
３月３日	こどもレストランきらっとまつり」	週刊うえだ
３月６日	「こどもレストラン・きらっと祭り」	週刊うえだ
３月１２日	震災の心　バトンリレー 節目の日に　改めて学ぶ教訓	信濃毎日新聞 ○テレビ放映　４社

３月１３日	震災の心、バトンリレー１０年 講演や高校生の詩の朗読も	東信ジャーナル
３月２４日	「生活困窮者へ食事提供」 「０円スーパー、０円弁当」の開催	信濃毎日新聞
４月３日	震災の心　バトンリレー 被災地支援活動を振り返り、詩の朗読も	週刊うえだ
５月２９日	上田発　子ども食堂へ食材を	信濃毎日新聞
６月１日	子ども食堂への食材物流拠点に	東信ジャーナル
６月１９日	**まるこ福祉会が東信の物流拠点に** **寄付食材などを子ども食堂に配送** **ホットライン信州と連携**	週刊うえだ
７月１日	若者の豊かな心・熱・力を実感 まるこ福祉会の子ども食堂の運営	信濃毎日新聞
８月７日	戦争の悲惨さ　９６歳　訴え まるこ福祉会で講演など大学生企画	読売新聞 ○テレビ放映　３社
８月７日	平和の大切さ　上田で考える	信濃毎日新聞
８月１２日	平和の心メッセージ・コンサート 小学生から高齢者まで平和な世界を	信州民報
８月１５日	知りたい信州の会社　まるこ福祉会 気を抜かず介助「人のため」実感	信濃毎日新聞
８月１８日	８．６平和の心メッセージコンサート 戦争体験者の講演や各世代が発表	東信ジャーナル
１２月１５日	物入りな師走　少しでも温かく １２月１９日　上田・丸子で食料等配布	信濃毎日新聞
１２月１６日	子どもの居場所づくりセミナー 「子ども食堂」が地域コミュニティの拠点	東信ジャーナル
１２月２５日	「０円スーパー・０円食堂」に４００人 「歳末助け合い」生活困窮者支援	東信ジャーナル
２０２２年 １月１５日	困窮者に食料など無料提供 「０円スーパー・０円食堂」開催	週刊うえだ
１月１５日	まるこ福祉会　市民ギャラリー 上田の堀尾さん　油彩画展	東信ジャーナル
１月１８日	「さわやかロード」思い今も	信濃毎日新聞
１月２５日	女性の強さ　油彩画に	信濃毎日新聞
２月６日	寿司と演奏　喜ぶ子どもたち　子ども食堂 まるこ福祉会　上田で振る舞う	信濃毎日新聞

２月１０日	まるこ福祉会に車いす　贈呈	東信ジャーナル
３月２日	上田高校生が「フードバンク」 校内で収集　まるこ福祉会へ 340 点寄贈	信濃毎日新聞
３月３日	「フードバンクｉｎ上田高校」が届ける	信州民報
３月８日	うな重食べて　親子ら笑顔 まるこ福祉会　こどもレストランで	信濃毎日新聞
３月９日	「フードバンクｉｎ上田高校」食料品寄付	東信ジャーナル
３月 10 日	コロナ対策し、「うな重」振る舞う まるこ福祉会　こどもレストラン	信州民報
３月 12 日	あれから 11 年、震災の心　バトンリレー 「福島離れ　東信で考え、伝える」高校生	信濃毎日新聞 ○テレビ放映　４社
３月 12 日	「原発事故　忘れないで」壇上で体験語る	中日新聞
３月 15 日	あれから 11 年「震災への備えを」	信州民報
３月 26 日	うな重に参加者が舌鼓	週刊うえだ

○新聞社の内訳　　合計４２回　　令和３年１年～令和４年３月

・読売新聞　２回　・信濃毎日新聞　１７回　・中日新聞　１回

・東信ジャーナル１１回　・信州民報　５回　・週刊うえだ６回

令和３年度　　施設別　事業報告

１、施設別　事業報告

１、　就労継続支援Ｂ型事業・生活介護事業

とんぼハウス　就労継続支援Ｂ型事業　　令和３年度年間利用者実績
　　生活介護事業　　利用者稼働率　80％
きらり　　就労継続支援Ｂ型事業　　令和３年度年間利用者実績
　　生活介護事業　　利用者稼働率 98.5％

１－１　利用定員・職員構成

		とんぼハウス		きらり	
事　業　種　別		就労継続支援Ｂ型	生活介護	就労継続支援Ｂ型	生活介護
利用者定員		２０人	２０人	３０人	１０人
職員	管理者	１人	１人	１人	１人
	サービス管理責任者	１人	１人	１人	１人
	職業指導員 生活支援員	５人	１３人	７人	８人
	看護師		１人		１人
	嘱託医		１人		１人

１－２　主な活動内容

	とんぼハウス	きらり
自主活動		
資材リサイクル作業アルミ缶回収	○	○
施設外就労	○	
農作物・果樹の栽培・収穫と販売		○
パン・クッキーの製造と販売		○
土壌改良とブルーベリーの栽培	○	
受託作業		
梱包用シートの再利用の簡易作業	○	○
カレンダーの袋入れ	○	
石鹸の袋詰めと販売	○	
チラシ折込と封入など	○	
ジャム瓶のシール貼り		○
プラステック部品の梱包作業	○	○
リサイクル品の回収と分別	○	○
リサイクル品の解体と分別	○	○
障害者優先調達推進法関係		
ベルパークの花壇散水作業		○
趣味や特技を活かした活動		
ハワイアンダンス	○	○
カラオケ	○	○
手話ダンス	○	○
楽習会	○	
読書	○	○
映画鑑賞	○	
フラワーアレンジメント	○	○

２　総合厨房　（パン工房ぐらんまるしぇと厨房）

①　職員体制

正規職員　５名　　臨時・パート職員　６名　　計１１名

（ア）　パン工房ぐらんまるしぇ

・パンの販売の他、ランチやテイクアウトも実施。

・東日本大震災復興支援コーナーの常設。

・健康食品コーナーを設置。

・丸子修学館高校でのパンの販売。

（イ）厨房

現在の給食数

・朝食　　特養　大樹の利用者　　29 食

・昼食　　特養　大樹の利用者　支援施設きらりの利用者　　約 100 食

両施設の職員

・夕食　　特養　大樹の利用者　　29 食

平成２９年２月１日より、きらり利用者、大樹利用者及び職員の給食を開始し、４周年を迎えた。

３　グループホーム

①　障がい者共同生活支援　ホームとんぼ　　第一、第二、第三

・世話人の確保もでき、世話人懇談会の実施。

・自力通所できる利用者は、バスを使って通所している。（８名）

・利用者との懇談会の実施。

４　上田市物産館　花風里　（令和４年２月で終了）

①　職員体制

正規職員　１名　　パート職員　２名

② 事業

・クッキーの製造（販売・注文）。

・すいせん祭り、ラベンダー祭り等のイベント。

・ランチ（国産うなぎを使用したうな重）の提供及び喫茶の提供。

5 地域密着型特別養護老人ホーム 大樹

① 加算状況：ユニット型介護費、看護体制加算、栄養マネジメント加算、サービス提供体制強化加算（Ⅱ）処遇改善加算（Ⅰ）特定処遇改善加算（Ⅱ）

② 令和３年度年間稼働率（長期入所）99.4％ （短期入所）22.1％

施設内での看取り ３ 名（本人の意向をくみ取り、嘱託医、家族、職員と連携し看取り対応ができました。）

③ 現在の総職員数 ２６名（兼務あり）

	常勤	非常勤	計
施設長	１人		１人
副施設長	１人		１人
医師（嘱託）		１人	１人
看護師	２人		２人
介護職員	１５人	５人	２０人
管理栄養士	１人		１人
生活相談員	１人		１人
介護支援専門員	１人		１人
機能訓練指導員	１人		１人
事務職員	１人		１人

④　短期入所（従来型）

平成 30 年７月より短期入所を再開後は、利用者が少しずつ増え、リピーターも多く継続利用いただいています。

⑤　福利厚生及び活動：全員の胸部レントゲン撮影実施により健康管理に努めました。

新規職員の採用により研修を充実させ、人材育成に取り組み意識改革を図りました。

全体学習会を定期的に実施し、職員一人ひとりが力をつけどんな場面にも対応できるよう努めてきました。

各種委員会活動を充実させてきました。

コロナ感染症対策による面会制限もあり、ご家族との面会が出来ない時期は、入居者全員のお宅に職員から利用者の様子や写真などを添えてお手紙を出し、出来るだけ安心して頂ける様に対応してきました。

面会自体も施設内では、キーパーソンのみ面会でアクリル板や次亜水噴霧器を使用したり、他のご家族の皆様にもガラス越し面会で感染症対策を取り安全な環境で行う事が出来ました。

コロナ禍でしたので、感染対策をしっかりと取りながら、施設内行事ユニット行事を工夫し、利用者に楽しんでいただきました。

さくら小路に植えていただいたいたブルーベリーが沢山実り、利用者と収穫して、そのまま獲れたてを食べたり、おやつ作りに使い楽しむ事が出来ました。

⑥　特養の使命である看取りも、平成２９年３月の開所以来 20 名の看取り行う事が出来ました。

1、行事等　事業報告

令和3年　4月　入所式
第32回こどもレストラン
お花見
ボランティア視察研修　福島

ボランティア研修～福島・三春滝桜

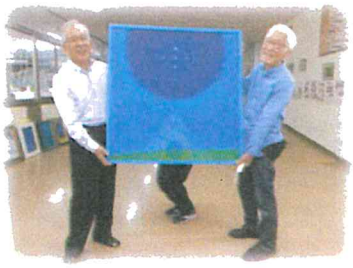
5月　花風里へ遠足
第33回こどもレストラン

ヨガ講座をはじめました

鹿教湯温泉・野天風呂

6月　第34回こどもレストラン

7月　第35回こどもレストラン
上田養護学校実習生受け入れ
鹿教湯温泉つるや旅館温泉旅行



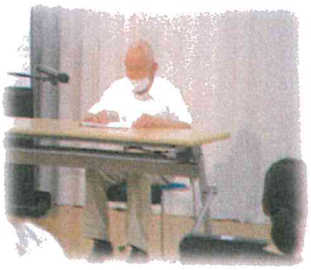
谷本先生より絵画の贈呈

8月　第36回こどもレストラン
利用者夏祭り
平和の心コンサート
大樹　夏祭り

平和の心コンサート・紙芝居

絵手紙講座

9月　第37回こどもレストラン
イ・ヨンボ秋のコンサート
アリオ・ハロウィンダンス参加



平和の心コンサート・体験談

10月　第38回こどもレストラン
秋の遠足（花風里）
サロン5周年清水研修

アリオ・ハロウィンダンス

11月　第39回こどもレストラン
劇団バク　公演
福祉空間開設5周年記念

みんなでマレットゴルフ

ちぐさ幼稚園の子供たち
ツリーハウスへ

12月　第40回こどもレストラン
こども食堂セミナー
お楽しみ会

ボランティア研修・清水港

今年も野辺山へ白菜取り

令和4　1月　第41回こどもレストラン

成人式

2月　第42回こどもレストラン祭
上田養護学校実習生受け入れ

今年も盛り上がったお楽しみ会

3月　第43回こどもレストラン
3.11震災の心バトンリレー
ボランティア研修金沢

こどもレストラン　～　きらっと　～

「赤いお屋根のとんがりハウス」

集団遊び

大人気のバブルプール

高校生のお姉さんとクレープ作り

そば打ちの体験

ハンモックでのんびり

食事盛り付けのスタッフ

お寿司屋さんの生寿司

子供たちの大好きなメニュー

打ち立てのお蕎麦と鰻ちらし

豪華うな重

連合婦人会・あったかい輪の皆さん

食事も学生ボランティアと

丸子修学高校・長野大学・上田高校等の学生ボランティア

たくさんの支援をいただきました

音楽・踊りで盛り上がりました